

國學院大學學術情報リポジトリ

仙台藩と神社：伊達政宗の神社政策

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 茂木, 貞純 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001936

仙台藩と神社

—伊達政宗の神社政策—

茂木貞純

要旨

仙台藩は、戦国大名伊達政宗を藩祖とする。当時、領国は合戦と政治状況の中で当然ながら変化していく。豊臣秀吉の奥州仕置きの後、大崎・葛西地方の一揆を経て、後の仙台藩領が決定される。関が原の戦いが済むと、政宗はその直後に岩出山城から、仙台に居城を移す。全く新たな仙台城とその城下の建設である。この時、伊達家とその家臣団はすべて先祖以来の領国を離れて、新たな土地で国造りを行わなければならなかった。

新たな統治秩序の構築及び居城や城下町の整備に平行して、伊達政宗は古来の社寺を修造、再興、復興している。奥州一宮塩竈神社、大崎八幡神社、瑞巖寺、国分寺薬師堂などである。多くが大和朝廷以来あるいは鎌倉幕府が東北経営に不可欠な社寺として、造営また創建し崇敬祭祀して来たものである。それらは今日、国宝、重要文化財に指定をされている。分国統治の責任者として、古社寺に所領や造営の資を寄進することは、当然のことでもあった。

しかし、仙台藩が特殊なのは、中世以来の伝統を踏まえて、藩主が一宮塩竈神社の大神主になっていく。在地の国人領主の祭政一致の伝統を引き継ぎ、更にこれを発展させている。近世大名として伊達家が繁栄するとともに、塩竈神社もその姿を変えていく。復古維新の実情を塩竈神社の社殿構造の変遷から考察する。

キーワード

塩竈神社、一宮、総社、権現造、流造、塩竈社縁起、伊達政宗、伊達綱村

はじめに

「神社祭礼に見るモノと心」グループでは、神社祭礼の中で用いられる神宝、神饌、神輿、装束、社殿、調度品などを対象として、これらの「モノ」から日本人の生活における祭礼の社会的意義、更には神々を信仰する「心」とは何か、を説明することを課題としている。この研究課題に取り組む為、現在二つの方向から作業をすすめている。

一つには、神社が所有する文化財にどんなものがあり、どんな特徴があるのか、国指定および都道府県指定の文化財のデータを集積し、整理をしてい

る。有形の文化財としては、神宝、社殿、装束などがあり、無形文化財では、祭礼文化にかかわる芸能など多数のものがあり、その概要の整理にも努めている。

二つには、神輿・山車・笠鉾や神饌など祭礼を直接彩るものに、具体的にどんな特徴があり、どんな分布があり、どんな影響関係があるのか、そしてそれらのものがどんな意味を持っているのか、実際の祭礼を研究対象にして、調査分析を続けている。特徴あるものを探すためアンケート調査も実施している。

こうした初期的段階の作業を通じて、宮城県的神社文化財に大きな特徴のあることに気がついた。仙台市を中心に国宝、重要文化財に指定された神社

社殿が多数存在すること、またそれらが、仙台藩祖伊達政宗公の造営にかか
る。何故、政宗はこのような建造物を造営したのか。本稿では、仙台藩の藩
祖伊達政宗の神社政策の意図、信仰の心に迫ってみたい。

一 伊達政宗の前半生―合戦と略略の日々―

伊達政宗の前半生は、戦国大名というに相応しく、まさに戦いに明け暮れ
る日々であった。天正十二年十月、父伊達輝宗から家督を相続した政宗は、
その祝賀の余韻が残るうちに、動乱の渦の中に巻き込まれていく。この時、
伊達氏の居城は米沢である。翌十三年五月には、境を接する会津の蘆名氏と
の戦端が開かれる。宿敵蘆名氏を摺上原の戦いに破るのは、天正十七年六月、
政宗二十三歳の夏のことである。

天正十八年、蘆名氏の居城であった会津黒川城に正月を迎えた政宗は、天
下をほぼ制圧した豊臣秀吉から小田原北条氏討伐の陣に加わるよう再三の督
促を受ける。しかし、諸事情により参陣の決定は遅れ、小田原に着陣したの
は六月五日のこと、小田原城陥落の一ヶ月前であった。それより前、秀吉
に服属していた蘆名氏を滅ぼしたことは、政宗を窮地に陥れた。だが、決死
の弁明が功を奏し、嫌疑は晴れるが、旧蘆名氏の所領は没収され、伊勢松坂
の城主蒲生氏郷に与えられた。また、現在の宮城県北部の大崎・葛西の地は、
それぞれ伊達家傘下の名族奥州管領の流れを汲む大崎氏、奥州総奉行の末で
ある葛西氏の治めるところであったが、小田原不参の咎により領地没収され、
秀吉の側近木村吉清・清久に与えられた。政宗は、所領の南北から豊臣傘下
の諸將に牽制される状況に陥ってしまったのである。

この年十月も末になり、大崎・葛西地方で一揆が勃発する。蒲生氏郷とと
もに政宗は一揆討伐にむかう。一揆の直接の原因は、所領を没収された大崎
・葛西の旧臣の不満と太閤検地とにあったが、これを裏面から煽動したとす

る政宗自筆の書状を家臣の一人が、蒲生氏郷に届けるといふ事件がおこる。
一揆は無事鎮圧されるが、秀吉の疑いは益々深くなる。しかし、持ち前の機
知と政治力でこれも脱することができた。この時、徳川家康のとりなしがあつ
た。

十九年には奥の大崎。葛西の地に一揆蜂起する聞えあるにより。関白再
び出馬せらるべしと聞えければ。君も是をたすけ給はむとて。下総の
古河までいたらせ給へば。一揆みな落うせて平らぎぬと聞ゆ。よてまづ
御馬を江戸に納め給ふ。此事に座して伊達政宗重く罪蒙るべかりしをも。
君とかくこしらえて。政宗ゆるされ國にかへる。夏の末より其一揆又蜂
起すれば。京よりは秀次を大将にて軍勢せめ下る。秋のはじめ又君
も御馬を出され。九戸などいへる城を攻落さる。此中に君は岩出山に
新城を築かせられぬ。これは政宗がしる所しばしばはがしければ。今
度はその所を取公せられ。葛西。大崎の地にうつさるべきをあらかじめ
はかりし給へば。その時住せんがため。かく堅固に築かしめ給ひしなり。
政宗もかくと承り。深く御恵のあつきをかしくみけるとぞ。¹⁾

これは、『徳川實記』の伝えるところである。結局、この事件で政宗は、本
貫の地を含む会津近辺の諸郡が没収され、あらたに大崎・葛西地方が与えら
れる。そして、まさに家康の計らいにより、米沢から岩出山に居城を移すこ
とになる。

その後、朝鮮への出兵があり従軍する。その間に秀吉に実子秀頼が誕生し、
政治状況は目まぐるしく変化し、秀吉の甥関白秀次失脚事件がおこる。そこ
で再び秀次謀反に一味したとの嫌疑をかけられることになる。この時、政宗
の尋問にあたった使者は、かねて親しい者でその申し開きを聞いて、「政宗
事天道盡果、此事最前二言上セス、運ノ極メナリト申シ、落涙マテニテ、御
請ハ申上ケサルノ由、言上セラル」と言つたという。

絶体絶命の窮地といえる。家督を息子の秀宗に譲り、自分は遠流にもとい
う覚悟であった。この折も、徳川家康の助言で虎口を脱する。「この事に座

して伊達。細川。淺野。最上などいへるもの等罪得べかりしも。君よく太閤をときさとし給ひて平らにおさまりしかば。此輩あつくかしこみ。いづれの時にかをのが命にかへても此御恩報ひ奉らんとぞはかりける」とはやはり『徳川實記』の記すところである。

その三年後、豊臣秀吉は没し、やがて関が原の戦いで、徳川氏の天下となる。関が原戦では、会津に移封された上杉景勝が反徳川となり、西軍に加担したので、伊達勢はこれを背後から攻撃し、東軍勝利の要因を形成した。同時に政宗はこれを機に更に所領を拡大しようとの野心があつたが、結果は失敗に帰した。徳川家康が、上杉討伐のため下野国小山まで出馬し、反転して関が原出陣に当たり、後顧の憂いなきよう、政宗に上杉の押さえを命じ、報奨として旧領七カ所を家臣共に与えるとの約束は、自らの野心のため無効になつた。結局本貫の地、伊達郡を回復することは、できなかった。

関が原の戦いに決着がついても、奥州では会津上杉攻めが未だ終結していなかったのだが、慶長五年の末、政宗は岩出山城から仙台に居城を移そうと起工する。翌年、北目城（名取郡）に正月を迎えた政宗は、

あらたまの年に常葉の色そます けふの子の日の松のみとりは
故郷の一重の花も開くなる 思ひこそやれ九重の春

と詠み、その十一日に仙台城の普請を始め、城下の屋敷割り等を命じている。この時、三十五歳である。

伊達政宗がこの時点でのような天下を予想していたのか、不明であるが、以後徳川幕藩体制は確立され、益々堅固で平和な社会が現出することになる。政宗は、寛永十三年に七十歳で死去しているので、この年はまさに人生の折り返し点である。同時に近世大名への出発点でもあつた。以後、仙台城とその城下、領国の整備がはじまる。前半生の戦乱の日々、「馬上少年過」時代に終止符を打ち、後半生の仙台藩創造にすべてを賭けることになる。

そんな正月の歳初めの抱負を歌に込めた。子の日に小松を引いたいにしえの故事を思い、その松の緑が増すことに伊達家の繁盛を夢見る。また、故郷

に咲いた一重の花、それは政宗自身に置き換えられるのであろうが、その連想から九重に及び、都の春に思いをはせる。政宗の人となり、教養と心意気のあらわれた歌と言うべきだろう。

二 仙台藩の国造り

領内統治の要である仙台城とその城下の建設は、伊達政宗の人物や統治構想を考える上で様々なことを教えてくれる。何故、政宗はこの地を本拠地にしたのであろうか。始め米沢の城で成長し、蘆名氏を滅ぼした後一時期会津黒川城に本拠を移すが、豊臣秀吉の奥州仕置き後米沢に戻り、大崎葛西地方の一揆後に所領の変更を余儀なくされ岩出山城（宮城県玉造郡）に移る。天正十九年九月のことで、政宗二十五歳の時であつた。

岩出山城は、大崎葛西地方の鎮撫を目的に設けられ、その目的が達せられると不便が目立つてきた。そこで、いくつかの候補地の中から選ばれたのが仙台だつた。小林清治氏の研究によりその理由を考えてみたい。第一の理由は、海陸交通の要衝に位置すること。奥州街道に沿い、江戸・上方との交通、領内各地との連絡の利便性が上げられる。至極当然なことである。しかし、それに劣らぬ理由が存在したと言う。

それは、この地区が陸奥国府の旧地であつたからだ。奥州守護、奥州探題家としての家門の誉れとともに実質的に奥州の覇者となつた伊達政宗の矜持と誇りが、この地を選ばせたのだ、と指摘する。

いうまでもなく仙台の地区には、奈良時代に多賀城の地に陸奥国府が設置され、木の下に陸奥国分寺・国分尼寺が建立されて以来、奥州の政治文化の中心地であつた。鎌倉時代にも、奥州留守職に任命された留守（伊

沢）氏は、この地区を本拠として奥州の支配に任じた。「建武中興」では、義良親王（後村上天皇）を奉じた北畠親房・顕家父子によつて多賀城に奥

州政府が開設され、その没落後も、北朝足利方の吉良・畠山両管領の奥州支配の本拠となった。奥州管領Ⅱ探題大崎氏が玉造郡に移つて以後の二世紀余りは、奥州の政治的中心となることをやめてはいたが、天下の景である松島および奥州一の宮塩竈神社をひかえて、なお奥州の文化の中枢であり続けた地区である³⁾。

つまり、交通の利便性もさることながら大和朝廷以来の奥州支配の伝統地であるが故に、ここに仙台城を築いたのだと、指摘する。

次に、家臣団の育成や農民統治の実態について、説明してみたい。仙台藩の石高は凡そ六十万石で、加賀百万石、薩摩七十万石について、第三位であった。しかし、仙台藩士の総数は七三〇人に上り、天下一の大藩という。家臣の二十三%に当たる一七〇四人に知行地が与えられ、その石高の合計は六十一万七千石となり、それだけで表高を超えてしまう。仙台藩の内高は百万石を超えるといわれているが、それにしても大変な数である。

家臣団は、最終段階で、一門、一家、準一家、一族、宿老、着座、太刀上召出、平士、組士、卒と序列化され、組士以上が武士階級とされた。政宗の時代に原型が作られ、第四代藩主綱村の時代に完成した。一門は、戦国時代に大名であった由緒を持つ家か、藩主の親族に列せられた家格、一家は、伊達家から早くに分かれた分家もしくは古くからの有力家臣に与えられた家格、準一家は、戦国時代の大名であった者の分家もしくは有力家臣に与えられた家格、一族は、有力家臣に与えられた家格、と概ね定められた。

一門の石川・留守・亘理・岩城・白川、および準一家の多くは、戦国時代には独立の大名だった諸氏である。蝦夷の松前は別として、北は葛西・天童から南は白川・岩城・蘆名まで、中南奥羽の目ぼしい戦国大名が、伊達の家臣に含まれているのである⁶⁾。

これらの諸氏は、政宗が家督相続をした天正十八年頃までに、伊達家歴代特に政宗の領土拡大過程で服属したというが、白川・蘆名・岩城などは仙台藩建設時に召抱えられた。これまでも服属した諸氏を家臣に加えてきたが、

新時代を築く矢先に、旧敵勢力を家臣団に組み入れた。そこが伊達政宗の非凡なところであろうか。結果、天下一の家臣団を抱えることになった。

仙台城とその城下の建設を進める一方で新しい農村秩序の構築にも意を注いだ。個々の武士や社寺の直接支配を制限して、藩主の言わば一元支配の確立である。慶長十二年二月十四日、『貞山公治家記録』によれば、宿老の富塚近江を総奉行に任じて、これまでの検地に不審があるとして、再検地を命じている。富塚は軍事民生両方面で功績を残した政宗の信頼厚き功臣である。「其身総奉行ニ申付候条、末代之事與云無相違様、任置候、謹言」⁷⁾と黒印状を示して、末代までの基礎となる重大な任務を命じた。

こうした地道な作業を通じて、律令時代・荘園制以来の郷、庄の地名を村に統一し、新しい秩序もとに農村の統治が開始された。

古くからの郷や村の分合がおこなわれて新しい村々が生まれたのは、この時期のことである。領内二十一郡の九百八十カ村が決定されるのは、政宗死後の寛永十七(一六四〇)年から二十一年にかけておこなわれた徹底的な領内検地によつてではあるが、その大体の形は、慶長・元和のころに整えられたとみることができ、領内を四区に分けて郡奉行を一人ずつおき、さらに十九の代官区に分け、これに一人ないし数人の大肝煎をおくという行政区分がほぼ備わったのもこの時期である⁸⁾。

仙台藩は、領内を南方、北方、中奥、奥の四区域に分け、ここに一人ずつ郡奉行が置かれた。各区はそれぞれ四〜五の代官区に分けられ、総計十九の代官区からなり、代官所に十九人の代官が置かれ、其元に大肝煎を任じて、各村々の管理を徹底した。各村には肝煎一人をおき、村組頭と通じて村を治めた。新しい秩序の中で肝煎が農村支配の担い手として重要さを増していった。これらの肝煎には、土豪・牢人などの旧武士が多く、大崎・葛西地方ではほとんど大崎・葛西の旧臣でしめられた、という。

政宗は、仙台城に移つてから数年の間に家臣の知行割を行っている。これまで行つてきた検地が終了した慶長十三年九月、総奉行に鈴木和泉重信、奥

山出羽兼清に任じ、其年末に知行割を完了させた（『貞山公治家記録』）。これにより先祖以来の領地を知行する家臣は全くいなくなり、すべて政宗によつて新たに与えられた知行地での出発となった。

家臣団は、すべて仙台北城下に屋敷が与えられ集住するとともに、平土以上の大半の家臣には在郷にも屋敷が与えられた。在郷屋敷の中で規模の大きなものは、規模や軍事・政治的重要性、成立の経緯などにもとずき城（一）、要害（十九）、所（三十五）、在所（三十八）とよばれ、大身の家臣に与えられ、一般の在郷屋敷とは区別された。城は、白石城であるが、一国一城制度のもと幕府から例外的に認められたものである。これらの知行地の権限については、次のような状況であつたと言ふ。

例えば所拝領の給人といえども、給所の百姓に対する裁判権は自分の居屋敷のある町場だけに限られ、しかもその処罰は戸結・縄かけ・押込めに制限された。町場以外の百姓の処刑および町場の百姓の重刑は、仙台的の寄合所（のち評定所）における評定衆の裁判にゆだねられたのである。また村々の行政は、郡奉行―代官―大肝煎―肝煎の系統によつて、藩主の支配が透徹していた。この定めが決定したのは寛文元（一六六一）年であるが、ほぼ同様な形態は政宗によつて打出されたことであろう。城・要害拝領の給人にしても、その領主権は大きく制限されていた。

政宗は、このほか産業振興のためにも独自の施策を実行した。製塩、金山開発、余剰米を農民から買い上げる買米制度、馬市を保護し良馬の生産を奨励、城下の町人には日市を設定し商業の発展を促した。おそらく政宗の構想および家臣団の合議の上に国造りの作業が急ピッチで進められた。新時代に向けた急ピッチな改革と、言つてよいだろう。

三 政宗の社寺造営（上）

仙台北城と城下の整備、領内統治の仕組みを整えると同時に、政宗は沢山の

社寺を造営している。社寺造営に関する記録を『貞山公治家記録』によつて整理してみると次ぎのようになる。

慶長 七年 この年 亀岡八幡宮仮殿造営

慶長 九年 この秋 竜宝寺八幡宮造営事始

慶長 十年 八月十五日 松島円福寺再造につき、自ら縄張り

慶長 十年 十二月十五日 松島五大大堂再造（現存、国指定重要文化財）

慶長 十年 六月三日 松島円福寺再造の斧立

慶長 十二年 六月 国分寺薬師堂再造仰出

慶長 十二年 六月 奥州一宮塩竈神社修造成就（その後再々修造、国指定重要文化財）

（定重要文化財）

八月 竜宝寺八幡宮造営成就（現存、国宝）

十月 国分寺薬師堂再興成就（現存、国指定重要文化財）

慶長十三年 三月 松島円福寺方丈造営上棟

慶長十四年 三月 松島円福寺方丈造営成就し瑞巖寺と号す（現存、国宝）

これらの神社三社、寺院三所の造営、修造、再造、再興は、仙台北城およびその城下の整備と同時期に行われている。当然、仙台藩の国造りに密接な関係がある。その意義について、それぞれの社寺の由緒を検討したうえで、小林清治氏は、次のように述べる。

まず五大大堂は、慈覚大師の草創といい、また征夷大將軍坂上田村麻呂の創建ともいわれる。政宗の五大大堂造営は、慶長五年の白石城攻略の夢徴のためと伝えられるが（『封内風土記』）、征夷大將軍の由緒との関係も無視できないのではなからうか。瑞巖寺は、政宗が自身の菩提寺として造営したもので、元来は慈覚大師の草創、北条時頼の寄与によつて円福寺と称した由緒ある寺である。天下の景松島に面するこの名刹の再興もまた、奥州の主にあつた事業であろう。奥州一の宮である塩竈神社と国分寺薬師堂の造営が、政宗の奥州探題Ⅱ守護家の意識と関係することは、いふまでもない。また、大崎八幡は、坂上田村麻呂が勧請し、のち奥州探

題大崎氏が尊崇あつたことと伝えられ、始め胆沢城、のち遠田郡田尻にあつたのを、政宗が岩出山を経て仙台に移し、さらに米沢の成島八幡を合祀した社である（『仙台市史』7）。

仙台城の普請始め以後一〇年間の仙台藩の基礎づくりの時期の建設事業が、政宗の奥州探題としての意識、すなわち正統な統治者であるが故の行為とみなしている。重要な指摘であり、且つ優れた理解と考える。そこで改めて検証を行ってみよう。まず、寺院について考察する。松島の瑞巖寺は、天長五（八二八）年、比叡山三代座主慈覚大師円仁が淳和天皇の勅宣により開基、はじめ青龍山延福寺と命名された、と寺伝に言う。地名により松島寺とも呼ばれた。『元亨釈書』によれば、松島寺に見佛という僧侶名が見え、天仁帝（鳥羽天皇）より仏像寶器を賜つたと記している。平安末期には確実に存し、最初、延暦寺と関係深い天台宗寺院として創建された。その後、鎌倉時代になり執権北条時頼の庇護をうけて將軍家の祈願所となり、円福寺と名を変え禅宗寺院となった。開山を法心と言う。『元亨釈書』や『沙石集』に伝記をのせている。南北朝時代の筑紫の僧宗久は、全国の歌枕を訪ね、『都のつと』を著している。そこには円福寺を覚満禪師の開山とし、百人の僧衆が住むと記している。室町期に至っても、回国聖が廻る一国一所の拠点寺院と認識され、大いに栄えていた。その後戦国期に衰退していった。盛衰はあるが、朝廷、鎌倉幕府の庇護の下に栄えてきたことが分かる。瑞巖寺竣工の折、政宗は学問の師であつた虎哉宋乙和尚に依頼して、「松島清龍山圓福瑞巖禪寺方丈記」を撰文させた。そこには次のような言葉がある。

仙台藩経営の拠点となる居城を、大和朝廷以来の奥州支配の伝統地仙台に築城し、ここに古くからある社寺を修造、再造、再興する意義を、伊達政宗の奥州探題としての意識、すなわち正統な統治者であるが故の行為とみなしている。重要な指摘であり、且つ優れた理解と考える。そこで改めて検証を行ってみよう。まず、寺院について考察する。松島の瑞巖寺は、天長五（八二八）年、比叡山三代座主慈覚大師円仁が淳和天皇の勅宣により開基、はじめ青龍山延福寺と命名された、と寺伝に言う。地名により松島寺とも呼ばれた。『元亨釈書』によれば、松島寺に見佛という僧侶名が見え、天仁帝（鳥羽天皇）より仏像寶器を賜つたと記している。平安末期には確実に存し、最初、延暦寺と関係深い天台宗寺院として創建された。その後、鎌倉時代になり執権北条時頼の庇護をうけて將軍家の祈願所となり、円福寺と名を変え禅宗寺院となった。開山を法心と言う。『元亨釈書』や『沙石集』に伝記をのせている。南北朝時代の筑紫の僧宗久は、全国の歌枕を訪ね、『都のつと』を著している。そこには円福寺を覚満禪師の開山とし、百人の僧衆が住むと記している。室町期に至っても、回国聖が廻る一国一所の拠点寺院と認識され、大いに栄えていた。その後戦国期に衰退していった。盛衰はあるが、朝廷、鎌倉幕府の庇護の下に栄えてきたことが分かる。瑞巖寺竣工の折、政宗は学問の師であつた虎哉宋乙和尚に依頼して、「松島清龍山圓福瑞巖禪寺方丈記」を撰文させた。そこには次のような言葉がある。

昔者本朝相模平將軍時頼、創圓福寺大道場於此地、而拜請法身和尚一以為開山祖師、蓋和尚者遙航海入宋朝、而統得徑山無準和尚之宋風、而即歸本朝一矣。輝騰古今之名衲也。雖然與麻年代深遠而佛宇僧庵儘廢壞矣。入眼荒榛破礎頽垣而已。今也本州之大守山陰中納言之後裔伊達少將藤原政宗朝臣、自從紀州熊野山取其材而改圓福之廢禪刹、營瑞巖之大伽藍、堅請吾派尊宿海宴和尚、住持本寺、專祈國泰民安一者也。

北条時頼以来の名利が荒廃していたのを、本国の領主となった山陰中納言の後裔である藤原政宗が国泰かれ、民安かれと祈るために、瑞巖寺として再興したと言うのだ。政宗の意図は明白である。

松島五大堂は、延暦二〇（八〇一）年あるいは大同二（八〇七）年の創建と伝えられている。征夷大將軍坂上田村麻呂、あるいは將軍坂上俊仁の造営という。田村麻呂は、延暦十六年十一月に征夷大將軍に任ぜられ、実際に現地に赴き夷賊を討伏するのは、延暦二〇年二月である。この時の肩書きは「征夷大將軍近衛權中將陸奥出羽按察使兼行陸奥守鎮守將軍」というものであった。東北地方に関わるすべての役職を兼務している。東北地方には大同二年、坂上田村麻呂の創建と伝える社寺が多く、この五大堂もその部類で、五大尊を田村麻呂が安置したのが始まりと言う。また、延暦二〇年、將軍坂上俊仁の創建で、はじめ毘沙門堂であつたが、慈覺大師により五大明王がまつられ、五大堂となった、ともいう。いずれにせよ、朝廷の東国経営の重大な局面にまつられた、と推測ができる。『都のつと』にも正確な描写があり、地元で大切に祭祀が継承されてきたようだ。

国分寺薬師堂は、聖武天皇の国分寺建立の詔によつて、創建された陸奥国国分寺跡に建設された堂宇である。国府の多賀城から約十キロ離れた、現仙台市内に国分寺、国分尼寺が創建された。しかし、中世にはほとんど衰退し、『都のつと』によれば、野良山となり草堂一宇があるのみと記す。天正年間になり、この地を領した国分盛重により、薬師堂が再興され、更に政宗によ

り再建造営された。鎮護国家の寺院の流れを継ぐ御堂である。

政宗が関わった寺院の造営は、すべて領国統治に必要な措置であった。朝廷や鎌倉幕府の創建の由来を尊重し、これを継承することにより正統の流れを確保し領国領民の安泰を祈ったのである。

四 政宗の社寺造営（下）

次に、神社造営を考えてみたい。まず、亀岡八幡宮であるが、『貞山公治家記録』に仮殿造営の理由について次のように記している。

去年伊達郡梁川亀岡八幡宮ノ社人、山田宮大夫清重・同彌兵衛重之兄弟相議シテ、密ニ八幡宮ノ神體ヲ載テ、仙臺へ来リ、御當家累代ノ守護神ヲ他領ニ於テ奉祀スルハ本意ニ非スト存シ、御國へ御供シ奉ルノ由、茂庭石見ヲ以テ言上ス。因テ神妙ニ思召サレルノ旨仰出サレ、如レ此先ツ假殿ニ安置セラレ、彼宮太夫ニ少分ノ給米ヲ賜フト云々¹⁴⁾

伊達家本貫の地、伊達郡に初代伊達朝宗により鎌倉鶴岡八幡宮より勧請されたと伝える社で、一族の守護神と崇められてきた。伊達家は元来藤原山陰の後裔で、はじめ常陸国真壁郡を本拠地としていたが、頼朝の奥州征伐のおり、軍功があり伊達郡を領し、以後伊達を名乗った。以来、徐々に勢力を拡大して奥州の覇者となっていく。仙台藩祖の政宗は、その十七代目にあたる。その原点の神社で、伊達家と密接不離であり、最初に造営された理由も納得できる。当初は仙台城ちかくの仮殿に祀られ、その後同心町に移築され、更に四代綱村の時代に、青葉城を望む亀岡の地に遷座した。壮麗な権現造の社殿を有していたが、その社殿は先の戦災により焼失し、現在の社殿はその後再建されたものである。

次に竜宝寺八幡宮であるが、簡単に由緒来歴を記すと「伊達氏入部前の仙北（仙台以北）の領主大崎氏の鎮守神として、もと宮城県遠田郡田尻町にあつ

た。葛西・大崎領に転封された伊達政宗が、玉造郡岩出山に居城すると、その鎮守としてこれを岩出山に移した。そして、さらに仙台に居城すると、これを再び仙台の現在地に移した。現存する社殿は、慶長九（一六〇四）年から同十二年まで四年間かけて造営されたものであり、桃山様式の権現造（石の間造）¹⁵⁾としては、京都北野神社とともに最古の遺構であり、国宝に指定されている」と説明される。現在は、大崎八幡宮が正式名称である。

原点に遡ると征夷大将軍坂上田村麻呂が鎮守府を多賀城から胆沢城に移すに際し、延暦二〇年に胆沢郡の八幡村に勧請された、と伝承される。その後、この地を領した大崎氏によって遠田郡八幡村に遷座し、大崎八幡宮として崇敬されてきた。大崎氏は、足利一門の斯波氏で、室町幕府より奥州管領に補され勢力を伸ばしていたが、奥羽両国が鎌倉府管下に編入されたため次第に衰えたと言う。その子孫が、大崎五郡を領し、奥州探題大崎氏と称して、戦国大名となっていた。

先にも記したように大崎・葛西一揆の後、この地方は伊達家の所領に帰すが、この地の領有支配は伊達家の命運を決する。よって岩出山に居城を移し、鎮守神大崎八幡を城下に遷座し、領民の鎮撫に全力を尽くしたはずである。その後、仙台へ居城を移すに伴い、青葉城の北西、広瀬川を挟んだ対岸の丘陵上に社殿を造営した。その際、米沢の成島八幡を合わせ祀った。成島八幡は成島庄の鎮守として、代々の所の領主により修造造営が繰り返されてきた。第八代伊達宗遠により、この地が領有されると拜殿が建立され、さらに歴代により修造が繰り返されてきた。つまり、旧領の鎮守とともに新たに所領となった大崎・葛西地方の鎮守神を大崎八幡宮として、仙台城の守護神としたのである。

最後に塩竈神社である。塩竈神社は、延喜式内社ではないが、『延喜式』主税式に当時の国ごとの予算を示した中に「祭塩竈神料一万束」とみえ、正税の中から祭神料を支出する重要な社であった。鎌倉時代には「一宮塩竈社」と称されていて、陸奥国一宮として国府と密接な神社として崇敬されて

いた。

国府の所在地、多賀城址から約二キロの他に鎮座し、古く塩竈六所大明神とも称されてきた。六所宮は地方国衙と密接な関係を有する総社の別称でもあるが、その祭神について古来諸説があり、一定していなかった。

一宮、総社について、一般的には次の様に理解されている。「総社は、国府の近辺または国府内に新たに社殿が設置された例と、既存の神社が総社にあてられた例とがある。後者の場合、一宮が総社を兼ねたこともあった。総社は国司の着任儀式の場とされるなど、国衙関係の祭祀執行の場として用いられたことが多い。また、一宮以下の神社への神拜、頒幣に先立つて総社で神事が行われることが恒例化しているなど一宮以下の有力社との関連も深い。このようなあり方から、一宮、総社については、平安末から中世の地方神社制度の確立過程に生み出され、ここで行われる国衙祭祀によって在庁官人・国人層の精神的結集が図られたという評価もなされている。」¹⁵⁾

このような理解の上に塩竈神社を当て嵌めてみると、当初国司の国家祭祀と密接に関連し、特に陸奥国特有の事情である蝦夷攻略の最前線、多賀城の守護神として崇敬されたのではないかと想像できる。その後、中世になると在庁官人や国人達による精神的支柱として信仰されるとともに国衙関連の神事儀礼が執行され、一宮あるいは総社とも称されるようになって行った、と理解できる。

當社は當國國府の附近にありて、特に當國鎮守、蝦夷鎮定の為に創立せられし六所社なれば、國司との関係の密接なるや勿論にして、他國の六所社総社と同様に國司が社務を総括せしや想像するに難からず。延喜式當社の祭料一萬束としたるも、古く當社の祭典が國費によりて行はれしを語るものとす。當社には斯くの如き沿革あるが故に、国守赴任せずして國政が主として在庁官人の手に帰するに至りても、在庁官人はなほ當社の社務に關係せり、これ後世當社の社家に在庁人後裔のある所以なりとす。御幣太夫志賀氏の如き其一也。

奥州藤原氏滅亡後、頼朝は伊澤家景を留守職として、國府に置き、これ當國の留守氏の起源にして、常に鎌倉幕府の勢力を代表し、在庁人の長官なるが如くなりたれば、従来の例によりて又當社の社務に關与し、大神主と稱するに至れり。¹⁶⁾

以上は『塩竈神社史』(古川左京編)の解説である。この鎌倉幕府から任命された奥州總奉行の留守職は、やがて伊澤氏の子孫によって世襲され、名字を留守と改め、国衙の権力を代表すると同時に塩竈神社の祭祀権をも掌握し、塩竈神社の社家の上に立つ大神主となつていった。

この伊澤留守氏とともに奥州總奉行に任じられ、軍政を担当したのが葛西清重である。ただ、南北朝の動乱をへて、室町時代になると古代以来の多賀國府はしだいに國政の中心としての機能を失つていく。しかし、奥州一宮塩竈神社はその後も陸奥國を代表する武士團の崇敬をもとに發展していく。また、留守氏も塩竈社の大神主として、宮城郡を中心とする領主として存続していった。天正期に記録された『留守家分限帳』によると、家臣團の氏名と知行高を示す中に、「宮さとの人数」十九人の社家をも載せていて、社家の人々も家臣團の一部に加えられていた実態を知ることができる。¹⁷⁾

このような塩竈神社であるが故に、伊達政宗が仙台藩を造り上げていく過程で修造することは、当然と言えば当然であった。慶長十二年修造の棟札には、「大檀那從四位少將松平陸奥守藤原朝臣政宗」と記している。¹⁸⁾この棟札は、現物は伝わらず、神社所蔵の棟札写による。実際、松平姓を許され、陸奥守に任ぜられるのは、慶長十三年正月なので何らかの事情があると推測されるが、陸奥守とすれば塩竈神社修造は当然過ぎることであった。なお、この任官の折、徳川秀忠より御腰物「來國光」を賜っている。この太刀は、延宝三年第四代藩主伊達綱村により、塩竈神社に奉納され、現在重要文化財に指定されている。

以上を要約すると寺院においては、すべて大和朝廷以来の鎮護國家、東國經營に關連する。神社では、伊達氏の氏神である龜岡八幡宮のみ、伊達家の

信仰によるが、大崎八幡宮、塩竈神社は、ともに陸奥国の領国経営、蝦夷攻略に欠かせない神社と位置付けられることが出来よう。特に、塩竈神社は一宮、総社として国政と密接に関わってきた。これらの神社を再建、修造することは、領内を統治する藩主としては、当然な措置で際立って特異なことではなかった。中世に成立した国衙寺社体制の中で、社寺が神事や法会を通じて、領民の統合に大きな役割を担ってきたことは、すでに指摘されている¹⁹⁾。こうした伝統を踏まえれば、領内の神社の所領を安堵、寄進し、建物を修造、再建することは、他の藩でも行っていることであった。全国的な規模で言えば、第四十二回神宮式年遷宮を徳川家康が施主となり、將軍徳川秀忠の奇進により、天下安穩を祈って慶長十四年九月に行っている事にも比肩しうる。

五 大神主となる藩主

伊達政宗の非凡なところは、手がけて再建造された社寺の建物が残らず、国宝・重要文化財の指定を受けていることだ。当代の最も優れた大工棟梁のもと経済的裏付けもあつて始めて可能なことであつた。また、塩竈神社にたいしては、特に崇敬を寄せて、歴代藩主が大神主として奉仕する基盤を作っている。

ただ、政宗が造営した塩竈神社社殿は、その後修造されたので現存しない。どの様な社殿であつたかも明確でない。ただ、塩竈神社は古来左宮、右宮の二つの社殿が並び立つ形式であつたようだ。観応元（一三五〇）年の文書に左右両宮の禰宜が所領争いをした事実があるので、二殿奉祭形式であつたことは、間違いがない。近世初期の神社社頭を描いた絵図にもそのように書かれている。仙台市博物館が所蔵する伊達藩の文書の中に「神社御用之物」のうち塩釜社絵図之写がある。元禄年間頃に写されたものであるが、中央に間口三間の建物二殿を配し、他の建物がその前や周囲に点在する。現在の社

殿の位置とは明らかに違うので、あるいは古来よりの形式を留めているのかもしれない²⁰⁾。このことは、奉仕する社家の人数からも推測ができる。左右両宮に一禰宜、二禰宜、三禰宜が置かれ、あわせて六禰宜の体制で奉仕している。六所宮と呼ばれる所以でもある。

慶長十二年政宗の造営にかかる社殿は、この古来の様式を踏襲した、と思われる。そして、かつて留守氏が陸奥国司の代理として、塩竈社の祭祀を掌り、社家の上に立ち、大神主として奉仕したように、その立場で神社に臨んだのではないかと推測する。伊達氏は、よく周辺の諸豪族と姻戚関係を築いてきたが、留守氏とも例外でなく、十四代郡宗、十六代景宗、十八代正景と伊達家から入嗣している。特に正景は政宗傘下の武將として、拔群の武功があり、その後裔は水沢の要害に居住、伊達一門として伊達を名乗り、一万六千石を以って遇された²¹⁾。

留守氏は、伊達一門となつていたので、政宗が陸奥守になれば当然、留守氏が継承してきた大神主の職を引き継いだと考えられる。政宗がそのように思考したであろうと推測する理由は、政宗の傳役に当つた片倉小十郎景綱の存在である。片倉小十郎は、その後政宗の片腕として活躍して白石城主となるが「米沢八幡宮之神主片倉式部次男ナリ」（『貞山公治家記録』）とあり、その辺の教養については十分に持ち合わせていたのでは、と思うからである。しかし、なにより政宗に続く歴代の藩主たちが大神主として振舞つていくことが最大の理由である。中でも、第四代伊達綱村の功績は大きい。慶長の造営以降二回の造営を経て、現在の社殿構造に至るわけだが、その間何が志向されたのか。次にそのことを考えてみたい。

第三代伊達綱宗は、万治三年六月一宮塩竈社の修造を計画し、総奉行に原田甲斐らを任じ、作事始が行われる。ところが、綱宗はその七月に行状おとがめで、幕命により逼塞隠居を命ぜられ、わずか二歳の伊達綱村が第四代藩主に就く。幼主のもといわゆる伊達騒動が始まる。しかし、造営は順調に進んだと見え、寛文三年四月に竣工、遷宮が行われた。綱村五歳の時である。

棟札に「大檀那藤原朝臣松平龜千代丸武運長久分国静謐」と記された。龜千代丸は伊達綱村の幼名である。

この時の社殿配置は、延宝七年仙台藩作事方の作成した図面が残っており、詳細に当時の様子を知ることができる。その指図によれば「正面の鳥居から石段を登ると長床があり、さらに間口一丈の唐門が建っていました。唐門を入ると正面に七間、四間の大きな拝殿があり、右手には貴船・只州二つの小社が置かれ、拜殿から石の間を連結して五間、四間の大きな本殿が配されます。この拜殿―石の間―本殿という構成は、いわゆる権現造と呼ばれる形式であり、すなわち当時の塩釜神社は、長床と拜殿の間に唐門があることを除けば、現在の大崎八幡宮とほぼ同じ様相であったことが明らかとなります」²²となる。

寛文十一年、原田甲斐等が江戸酒井雅楽頭の屋敷で評定しているとき刃傷沙汰を起こし、伊達安芸、柴田外記を斬り、自らも酒井家家臣に斬られて藩を二分した騒動に終止符が打たれた。関係者は処罰されたが、仙台藩には何のお咎めもなかった。危うく取潰しをまぬがれた。

延宝三年十一月十日、十七歳の若き藩主は、塩竈神社に参り、沐浴齋戒し祝詞を奏上、御太刀一振・來國光、神馬一匹を献じた。藩主に就いて初めての正式な神拝である。將軍拝領の太刀を奉納しているので、参拜式にかける意気込みを感じることができる。以来、ほぼ毎年自身もしくは代参による一宮参詣のことが『治家記録』に見える。延宝五年、七月十日例祭の参拝を済ませ帰城した綱村は、その日のうちに塩竈神社別当の法連寺宛に、神社の由緒の調査を命じ、社人、楽人、付属の仏堂などに至るまで、こまごまと指示を与えている。その消息の中に「社法たたし」あるいは「伊勢吉田などへ申遣すべく候」「末社其外惣而少も知レ候分書立」などの文言が見える。その点から推測すると、徹底した調査を行い、神社を本来の姿に正したい意向が伝わってくる。²³

その動機は、伊達騒動を辛くも乗り切ることができた事や、藩祖修造時と

社殿形式、配置が大きく変わっていたことに原因があった。慶長の社殿は綱村誕生の頃までは残っていた筈なので、昔語りを聞かす者もいたであろう。一方で綱村は、伊達家の出自を明らかにした「伊達出自世次考」や中世伊達氏の事績を明らかにした「伊達正統世次考」を編纂した。また、仙台藩成立にいたる十六代輝宗、十七代政宗、十八代忠宗の事績編年で記録した「治家記録」、藩正史を編纂しているのも、真実や原点への志向は人一倍強い物があつた。

こうして成立するのが『鹽竈社縁起』²⁴である。元禄六年九月、神祇管領の吉田兼連が述作している。社家に残る記録その他残らず調べ上げ、春日、香取、鹿島などにも問い合わせ、それらの諸資料をもとに綱村自身が精査吟味して、最終的に吉田兼連のもとで完成した。ここで古来諸説あつた祭神が確定する。すなわち、以下の通りである。

左宮 武甕槌命
右宮 経津主命
別宮 岐神

その由来について「社家所傳及旧説曰、天孫降臨之始、経津主大神武甕槌大神、先降平定葦原中国時、以岐神為郷導、周流削定、終至陸道奥國、祭此三柱神於斯地」と述べる。また、岐神は「塩竈六所明神、或曰猿田彦、事勝國勝、塩土老翁、岐神、興玉命、大田命、也」六座、(同体異名神祠之於別宮也。)とし、塩土老翁が塩釜に塩つくりを伝えたこと、祭礼の時に別宮の巫女がまず鈴を振り、先達巫女と称えるのは、別宮の神が左右両宮を導いてこられたからだとする。また、「三河國岡崎六所明神者、勸請當社之別宮、是東照大神産生神也」という。徳川家康の出生地、三河國岡崎の六所明神は、この別宮を勸請したのだという。縁起には特に理由を示していないが、徳川家康より七、八代前の遠祖松平有親・親氏が塩竈付近に居住している。その折に機縁が生じ勸請したと言う。

この縁起の特徴は、原点を国史(神話伝承)に求めていることだ。もう一

点は、徳川氏との関係を強調していることだ。言うまでもなく岐神伝承は、『日本書紀』の一書に見え、縁起の文字使いも書紀によっている。香取・鹿島神が軍神として、蝦夷攻略の最前線に祀られて来た史実とも一致することで、はじめてこの伝承記事を知ったときは、驚いたに相違ない。一宮、総社として中世以来、塩竈六所宮と呼ばれ、祭神に諸説あつて定まらなかつたが、この伝承で合理的な説明ができた。そして、六所の由来は、岐神の六つの同体異名神にあるとし、しかもこの神は徳川氏と密接な神という。これは、第四代藩主伊達綱村の確信であり、強い信仰の賜物ということができよう。

この縁起に基づき、塩竈神社は大きく姿を変えることとなる。元禄八年八月、藩主綱村の一宮修復に関する覚書がのこされている。その中に、塩竈社は元々両社であつたが、寛文中造営の時、私に一社にしてしまった。勿体無いことである。屋根替えなどの必要が生じ、造替しなければとここ数年考えてきたが、本来の姿を相究めないうちにはと思ひ延引してきた。しかし、この程得と相究めることができたので、造替したい旨の記述がある。²⁵その上で、左宮、右宮、別宮の三殿にし、現拝殿はそのまま左宮・右宮の拝殿とし、現本殿を別宮の拝殿とすること。只州社は本来なかつたはずで、社家の渡世の為に創建されたもので、社地を選んで遷すことなど、細々と指示している。

寛文造営の権現造の本殿、拝殿を利用し、左宮・右宮・別宮の本殿は、すべて同じ大きさで、流造を以つて造営された。元禄八年の年末に至り起工翌年三月仮宮竣工し仮殿遷宮、宝永三年九月正遷座となる。この間、元禄十五年仮殿炎上という不慮の事故があつたが、第五代伊達吉村のときに完成、正遷座となつた。宝永造営の現社殿は、平成十四年重要文化財に指定された。造営された本殿は、これまでの権現造の本殿とはまったく意匠を異にする流造であつた。

「左宮と右宮及び別宮の各本殿は、ほぼ同寸同大、同形式の三間社流造。桁行三間、梁間二間、三方に縁、浜床をそなえた素木造。柱は円柱で、柱上には舟肘木を置きます。屋根は檜皮葺。檜の良材を用い、総体として清楚な

印象を与える建築です。なお廻廊・瑞垣・廻廊・本殿も、すべて元禄期の造営以降、遷宮時に部分改修を施しながら現在に至っています。」²⁶ 造成時には、流造の原点である京都賀茂社に人を派遣して学ばせたという。

この変更は、一宮塩竈神社の源を考証し、一面では古代復興であるが、仙台藩という新たな国造りと平行して、中世陸奥國一宮塩竈神社から、近世幕藩体制下、仙台藩の一宮塩竈大明神、塩竈六所宮への大転換と位置付けることができよう。古代回帰であると同時に新たな創造でもあつた。祭祀権を掌握した大神主としての藩主にしてはじめて可能なことであろう。寛文造営も祭祀権を有していたが故の変更であつたが、残念ながら恣意があつた。綱村はそれを正した。種は藩祖伊達政宗が蒔き、第四代綱村によつて完成された。第五代吉村は、元禄十六年八月襲封すると、直ちに太刀と馬代砂金十両を献じた。以来、治世の節目に太刀・神馬の献上が恒例となり、幕末に及んである。現在、塩竈神社にはこれらの太刀のうち刀身三十五振が伝存し、「塩竈神社の藩主奉納太刀」として宮城県の有形文化財に指定されている。これも武家社会の贈答の慣習を元に、あらたな神事儀礼の創出といえる。

註

- ① 「東照宮御實記巻四」(『新訂増補國史大系』第三十八卷 六十頁。)
- ② 「貞山公治家記録 卷之十九」(『仙台藩史料大成 伊達治家記録』 二四〇頁。)
- ③ 「東照宮御實記巻四」前掲書、六一頁。
- ④ 「貞山公治家記録 卷之二十一」前掲書、五五五頁。
- ⑤ 小林清治著『伊達政宗の研究』(吉川弘文館) 二五五頁。
- ⑥ 同書、二六六頁。
- ⑦ 「貞山公治家記録 卷之二十一」前掲書、五五五頁。
- ⑧ 小林清治著『伊達政宗』(吉川弘文館、人物叢書) 百二十三頁。
- ⑨ 同書、百四十二〜三頁。
- ⑩ 前掲『伊達政宗の研究』 二五五頁〜六〇頁。
- ⑪ 「貞山公治家記録 卷之二十二」前掲書、五五五頁。
- ⑫ 同書、五二五頁。

- (13) 『神道史大辞典』(吉川弘文館)大崎八幡宮の項、高橋富雄執筆。
- (14) 建久四年三月の將軍家下文に「一宮鹽竈社」と見える。(『鹽竈神社史』六十六頁)
- (15) 國學院大學日本文化研究所編『神道事典』(弘文堂)一宮の項、並木和子執筆。
- (16) 『鹽竈神社史』七十一～一二頁。
- (17) 同書、百二十五～三十頁。
- (18) 『特別展 奥州一宮鹽竈神社―しおがまさまの歴史と文化財―』図録(東北歴史博物館)四十頁。
- (19) 井原今朝男「中世の国衙寺社体制と民衆統合儀礼」(『中世一宮製の歴史的展開 下』参照。
- (20) 前掲、特別展図録、四十頁。
- (21) 仙台郷土研究会編『仙台藩歴史事典』による。
- (22) 前掲、特別展図録、六十頁解説。
- (23) 『鹽竈神社の御社殿と御造宮展』図録(鹽竈神社博物館)にのせる延宝三年七月十日、別当法連寺宛文書による。

- (24) 『神道大系 神社編二十七 陸奥國(下)』に収載された『鹽竈社縁起』による。
- (25) 『伊達治家記録』鹽竈関係史料(鹽竈神社博物館)によった。
- (26) 前掲、特別展図録、六十一頁解説による。

本稿執筆に当っては、志波彦神社・鹽竈神社宮司鍵三男氏に多大な御配慮を賜った。更に、同社の鹽竈博物館の柏木、茂木両氏には資料提供など数多くの御教示に預かった。衷心よりお礼を申し上げたい。また、平成二十年十月十一日開催のフォーラム「鹽竈神社社殿の変遷」における尾崎保博氏、池谷浩一氏の御発表にも触発をうけた、記して感謝したい。